

近年のがん治療について

がん薬物療法とはなんだろう？

*がんってどうしてなるのだろう？

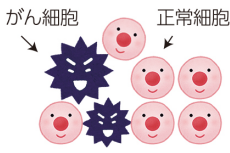
人間には生命を維持するために、細胞が分化したり増殖したりする遺伝子を持っています。その遺伝子の中には、がんを増やそうとする遺伝子と、それらを防ごうと働いてくれる遺伝子が存在します。私たちの身体には、がんを増やすためのアクセルと、それらを防ごうとするブレーキの両方の働きが備わっていて、そのバランスが崩れてしまったときに、がん細胞が増え、しまい、がんになってしまふのです。

正常な細胞の一部ががん化してしまっても、免疫の働きが十分に発揮されれば、がん細胞が死滅され、本格的ながんに発症するのを防ぐことができます。こうやって、身体の中で、免疫が働き続けてくれるため、がんが発症するまでに10年や20年と長い年月がかかるのです。

*がん治療にはなにがあるのだろう？

現在でも以前と変わらず「手術療法」「薬物療法」「放射線療法」の3大治療が主流です。これらの治療のなかで主治医

は「なにが患者さんにとって最適な治療なのか」を考えています。今回は薬物療法(抗がん剤治療)について話をさせていただきます。



*抗がん剤ってどんな種類があるのかな？

抗がん剤の種類はとて多くあります。細胞を殺すための「殺細胞性抗がん剤」、がん細胞の分子に作用する「分子標的薬」、免疫を活性化させる「免疫チェックポイント阻害薬」の主に3種類に分けられます。

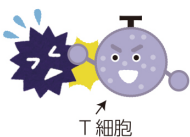
抗がん剤には多くの種類があり、それらを何種類か組み合わせることで投与する薬剤が決まります。いままでは、吐き気、脱毛、食欲不振、骨髄抑制などの副作用がありました。現在は支持療法が進歩したため、それらの副作用症状は軽減できるようになってきました。

しかし、分子標的薬や、免疫チェックポイント阻害薬を使用することが増えてきたため、いままでも起きなかった皮膚障害や、甲状腺の病気、下痢、倦怠感などの副作用が、治療開始数ヶ月たつてから出現するようになりました。近年注目されている治療法が、免疫チェックポイント阻害薬を使用する免疫療法です。

*免疫チェックポイント阻害薬ってどんな薬で、どんな副作用があるのかな？

始めにお話ししたように、私たちの身体の中には、免疫が備わっており、がんが増殖しないようにブレーキをかけてくれているT細胞が存在しています。この

<体内の免疫T細胞>

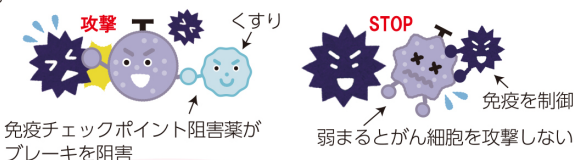


T細胞が弱まったり、がん細胞が「攻撃するな」とブレーキをかけてしまうと、T細胞はがん細胞を攻撃しなくなるため、がんが増殖してしまいます。がん細胞からのブレーキがからまないよう阻害し、T細胞がしっかりと働いてくれるようにするのが、この免疫チェックポイント阻害薬です。

免疫チェックポイント阻害薬は、どのがんにも使用できるのかといったら、そうではありません。一部の種類のがんとなりませので、気になる方は主治医へ相談してみてください。

免疫チェックポイント阻害薬は、免疫が働きすぎてしまうことによる副作用が出現する可能性があります。この免疫に関連した副作用は「免疫関連有害事象 (irAE)」と言われています。irAEは、皮膚、消化管、肝臓、肺、甲状腺などに比較的多く生じることが知られています。すぐに出現するのではなく、数ヶ月たつてから出現することもありますので、「体にブツブツができてきた」「食欲がなくなった」「下痢をしている」などの、体の不調などを感じたらすぐに主治医、薬剤師、看護師へ相談してください。治療がスムーズに行えるように、認定看護師として、しっかりと管理させていただきます。

<免疫チェックポイント阻害薬の働き>



岩科 麻見

看護科/外来化学療法室
がん化学療法看護認定看護師